



TITLE:

太平洋學術會議の沿革について

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 太平洋學術會議の沿革について. 天界 1933, 13(146): 207-211

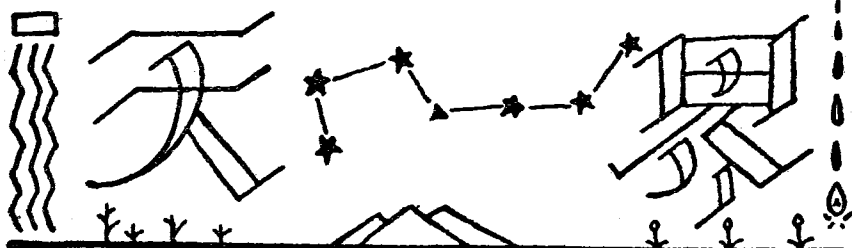
ISSUE DATE:

1933-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162371>

RIGHT:



第百四十六號

(第十三卷)

昭和八年六月

## 太平洋學術會議の沿革について

山 本 一 清

来る六月一日からカナダ領のバンクーバーとヴィクトリア兩市で開かれる 太平洋學術會議 Pacific Science Congress は、今年が創設以來の第五回總會である。今までには

第一回	1920年(大正九年)	米國ハワイのホノル、市で
第二回	1923年(十三年)八月/九月	濠洲メルボルン市で
第三回	1926年(十一年)十月/十一月	我が日本の東京市で
第四回	1929年(昭和四年)五月/六月	ジャワのハタビヤ・バンドン兩市で

上の如き總會を経て居る。第五回は、元來1932年にカナダで開かれる筈になつてゐたのであるが、主催地の止むを得ない都合により、一ヶ年延期となつたのである。

そもそも此の太平洋學術會議なるものは、1919年頃から發意され、殊に此れの創設のためには北米合衆國の學士院 National Academy of Sciences が非常に斡旋盡力し、それに、ハワイにゐる Fork 氏といふ人がいろいろ世話役をつとめたのであつて、其の結果、1920年にホノルルで開かれた時には、“Pan-Pacific Science Congress” (譯して「汎太平洋學術會議」)と呼ばれたものである。しかるに、フォード氏は、以前からホノルルで Pan-Pacific Club といふ團體を主宰してゐる人であるため、深い事情を知らない世間の人々は、とかく此の Pan-Pacific Club と上記の Pan-Pacific Congress とを混同し、

互ひに迷惑もあるので、1929年のジャワの總會以後は、學術會議の方を PACIFIC SCIENCE CONGRESS と呼ぶことに改めたのである。

世界に學術的な團體や會議は多い中に、この Pacific Science Congress は如何なる目的や特色を持つてゐるかといふに、目的は

- (1) 理學の進歩發達のため
- (2) 國際親善のため

又、特色は

- (3) 太平洋に關するあらゆる理學を包含すること
- (4) 英語を會議の公用語とすること

である。

およそ總ての學術會議は、(1) の如き目的を有する點に於いて例外は無いが、(2) の如き一箇條は蓋し太平洋學術會議の特色に數へても好いことであつて、従つて、1920年の第一回總會以來、各國は、人格的に、社會的に、名望ある人士を其の代表として送り、主催側に於いても、接待や其の準備は言ふまでもなく、プログラムの編成等にも頗る意を用ゐ、夥しい豫算を計上し、又、學者以外の多くの社會人士をも之れに参加せしめて、萬全を期することにしてゐる。

會議に包含される學科目に付ては、1920年の第一回總會の時には、試験的の意味から、極めて狭く、殆んど博物學 (Natural History) に限られた觀があつたが、回を重ねるに従つて廣く其の他の方面も漸次含まれるに至つた。殊に、會議の組織や統制等に於いて見事な完成の域に達したのは、かの1926年の東京會議であつて、あの時に採用された組織やプログラムや、幾多の宣言、乃至、決議事項等は、其の後の1929年のジャワの會議にも、又、今年のカナダの會議にも、權威ある準據となつてゐる。

會議は、近年、常に

- [1] 物理學部 Division of Physical Sciences,
- [2] 生物學部 Division of Biological Sciences,

の二部に分れ、只、1929年のジャワの會議の時だけは

- [3] 農學部 Division of Agricultural Sciences,

といふ一部門が作られたが、元來、「3」は生物學部に含まれるべきものであるのだから、今年のカナダの會議のプログラム中には省かれてゐる。上記の各部は、又、多くの課 (Section) に分れてゐるのであるが、1926年の東京會議の時は、全體のプログラムが餘りに各課の會合を多くし、之れを重んじ過ぎたがため、部として、又、會議全體としての連絡の缺けた恨みはあつた。そこで、1929年のジャワの會合には、課よりも部を重んじる傾向を見せ、其の缺點を匡正するに力めた。

太平洋學術會議中の一課としての天文學は、始め殆んど其の獨立した存在を自認しなかつたものであるが、1926年の東京會議の時以來、明らかに獨立した一課となつた。しかし、天文學の内容には、勿論、太平洋と無關係の問題が極めて多いのであるから、今回のカナダの會合に於ける問題としては、

- 1) 天體の變光性殊に太陽の變動
- 2) 太陽輻射と氣候との關係
- 3) 太陽活動と地磁氣との關係
- 4) 無線受信と太陽黑點週期
- 5) 國際經度觀測

等々が擧げられてある。

太平洋に無關係な問題を此の會議に持ち出すべきもので無いことは、自分も夙に考へてゐた所であつて、例へば、1926年の東京の總會に自分の提出した論文は、

- a. 太平洋方面に於ける天文臺の分布、並びに觀測地の調査研究
- b. 東洋に始められた太陽黑點觀測
- c. 太陽黑點相對數と太陽熱恒數との關係

又、1929年のジャワの會議に自分が提出した論文は、

- d. 太陽活動の指示數に關する批判
- e. スマトラに於ける日食觀測の假報告

であつた。尚ほ此等の外にも、

- f. 太平洋方面に於て行はれる天文經緯度
- g. 太平洋方面の時刻觀測
- h. 太平洋方面の標準時制

等々、可なりクラシカルな問題も、こゝで論議されるべきであらう。

只、今まで、東京やジャワの總會に於いて、或る天文學者たちは、二重星や、變光星や、恒星スペクトル等々、特に太平洋と關係の無い問題を取り扱はれたのを見受けたが、此等は會議の目的や特色に合致せないものとして、將來は注意さるべきであらう。

最後に、太平洋學術會議に参加する國は、只、地理的に、太平洋を圍む如何なる國でも差支へ無いわけであるが、事實は、始めから全く参加しない國も(殊に南米あたりに)ある。又、代員の數は、1929年のジャワの時には無制限であつたがため、我が日本からは四十幾名の多數が参加して、他の國々を驚かせたこともあるが、他の場合には、主催側に於いて、大抵定員數を割當てゝ來てゐる。現に今1933年のカナダの總會に代員數として定められてゐるのは、

アルゼンチン	2人	ハ　ワ　イ	5人	パ　ナ　マ	1人
濠　州	10	ホンヂユラス	1	ベ　ル　ー	5
カ　ナ　ダ	20	香　港	2	フィリピン	5
チ　リ	7	インドシナ	10	ポルトガル	1
支　那	10	日　本	15	サルワドル	1
コロンビヤ	4	マ　カ　オ	1	シ　ヤ　ム	3
コスタリカ	1	メ　キ　シ　コ	10	海峽殖民地	5
エクワドル	3	オ　ラ　ン　ダ	5	米　國	25
フ　ラ　ン　ス	7	蘭領インド	10	ロ　シ　ヤ	10
英　國	10	ニウジランド	5		
グアテマラ	1	ニ　カ　ラ　ガ	1		

即ち合計196人である。しかし、目下、世界を擧げて不景氣の時期であるから、各國が果して上記の如き定員數を参加せしめるや否や、疑はしい。しかし、幸ひにして我が日本は、學術研究會議から9人と、他から6人と、合計15人が選ばれ、皆元氣よく出張することとなつた。

因に、日本よりカナダへの代員は下の15名である。(ABC順)

東北帝國大學教授	理博	畑　井　新　喜　司	(學研及東北帝大代表)
中央氣象臺技師	理博	藤　原　咲　平	(學研及中央氣象臺)
金澤醫科大學教授	醫博	古　畑　種　基	(學研及金澤醫大)
東京帝國大學教授	工博	鯨　井　恒　太　郎	(學研)
京都帝國大學教授	理博	横　山　次　郎	(學研及京都帝大)

東京帝大航空研究所員 理博	小 畑 重 一 (學研	ク)
海軍水路部技師 理博	小 倉 伸 吉 (學研	ク)
京都帝國大學教授 理博	山 本 一 清 (學研及京都帝大	ク)
九州帝國大學教授 理博	山 根 新 次 (學研及九州帝大	ク)
地質調査所員	千 谷 吉 之 助 (學研及地質調査所	ク)
京都帝國大學助教授	前 田 義 象 (京都帝大及學研	ク)
臺北帝國大學教授	平 坂 恭 介 (臺北帝大及學研	ク)
森林研究所	杉 浦 與 一 (森林研究所及學研	ク)
東京帝國大學教授 理博	坪 井 誠 太 郎 (學研	ク)
高等農林學校教授 農博	植 木 穂 美 樹 (拓務省及學研	ク)

以 上

(編者註. この原稿は昭和八年五月13日午後2時, プレジデント, クリーヴランド號にて横濱出帆直前, 發送されたものである.)

## 本年度の總會に就いて

本年度の東亞天文協會總會は来る十一月初旬, 東京に於いて開催される事になつた. 今年の總會で期待すべき事が多々あるが, 先づプログラムを示すと大體次の如くである.

一 協 議 會	
二 研 究 發 表 會	
三 親 睦 會	
四 講 習 會	「天體觀測法」 約 一 週 間
五 講 演 會	山 本 會 長
六 見 學	五 藤 齊 三 氏
學	東京天文臺その他

今年は特に山本會長の歸朝後間もない事であるから, この會合を機會に大いに新知識が輸入されようし, 關東方面では本會最初の天文講習會の開催計畫や會員の研究發表會, 天文に關連した諸處の見學等が豫定され, 今からその盛況が偲ばれる.

今度の總會は例年の如く, 協議會や會員の親睦に止まらず, 有益な學会的會合計畫が主案となつてゐる. 殊に廣く會員達の日常の研究事項を相互に自由に發表し得る機會を設けたから, 今から創案を練つておかれたい. 見學先も最も適當な處を考慮中である. 精細は號を追つて發表するが, 各地からの多數會員の參會を希望して止まない.

(東亞天文協會)